

よむ？

俳句はどういう風に読んだらよいのか、よくわからない。教わった記憶もない。

はたして、俳句は読むものなのか、どうか。それすら怪しい。

俳句をどういうように解釈すべきかについては、いくらか見当がつかないわけではない。

ところが、どういう風に読めば、解釈なり鑑賞なりが生まれるのか、はつきりしない。

戦争中の学生であつたが、われわれはよく句集を読んだ。ところが、その読み方が落着かない。

ざっと目を走らせるだけなら、すぐ読めてしまうが、それではいけないことは、わかっている。

句会の披露で、二度読む。それを真似てみるが、しつくりしない。三度、四度とくりかえしても、必ずしもよいとは限らない。

やがて戦争がはげしくなつて、句集も手に入りにくくなる。勤労動員に出て、夕方、宿舎へかえると、防空遮蔽幕のついた電灯の下で、句集を筆写した。

仙花紙の答案用紙かなにかの裏を使つて、水っぽくすいインクで、ゆつくり写して行く。こおろぎのなき声につつまれて夜のふけるまで写本をしたことが夢のように思い出される。そして、俳句はこうして味わうのがいちばんだと思つた。目で読んでいるだけでは本ものではない。口ずさんで、手で書いてみて、はじめてわかるものがある。

戦後、俳句は第二芸術だという論があらわれて俳句界をふるえ上らせた。

やがて、その論おかしさの依つてきたところは、案外、俳句の読み方にあるのではないか、と思うようになった。外国語の活字をにらんで読む——これはおそらく読みの極限状況であらう。わからなければ、辞書を引く、註釈を参考にする、文法の助けもかりる。とにかく、活字を攻めて行つて、頭で読むほかはない。

これはつまり散文の理解の仕方である。局外に立つた人間の読み方である。俳句でこういう読み方をすれば疑問は雲のようにわいてくる。そもそも何を言っているのかもはつきりしない。これで独立した表現と言えるだろうか、第二芸術どころではない。われわれにとって外国語の読み方がもつとも尖鋭な意識に支えられていて、その限りでは知的にもすぐれた読みの方法である。それを、俳句に適用したところに悲劇があつた。

それというのも、俳句の読み方がはつきりしていないから、つい、散文の読み、外国語の読みを援用してしまう。目と頭だけでわかろうとする。それが俳句にとって、いかにひどい仕打ちに

なるか。

短詩型文学は、散文を読むように読んではいけないのである。そもそも「よむ」こと自体が詩となじまない。朗唱、朗詠すべきであろう。声にして、音にして、その響きが意識のほの暗い所をゆきふる。いわば心で読む。

俳句の表現そのものは、きわめて、小さな音しかたでないが、享受者の心を共鳴箱にして、ヴァイオリンの絃の音がすばらしい豊かな音になるように、増幅される。

散文においては、読者の共鳴箱にもたれかかった表現はむしろ邪道であるが、詩歌では共鳴を無視するわけには行かない。深いところに眠っているわれわれの共鳴箱をゆり動かしたとき、ことはは力なくして、鬼神を泣かせることができる。

活字印刷になれきってしまったわれわれは、詩歌に対してあまりにも近代読者のでありすぎるように思われる。もともと文字はことばの影のようなものである。影だけをどれだけ忠実に追ってみても、本体をとらえることはできない。散文は影と実体が一致しているから、文字面からでも心を汲むことができるが、詩歌では心に響くものがなければ、何もならない。

ひよっとすると、俳句は読んではならないのかもしれない。

テンス

ある文学概論の本の中に、叙情詩は現在時制の詩である、と定義してある。感情を吐露するのに過去形の動詞では相応しくないというのであろう。

対照的に物語性のよりつよい叙事詩は、主として過去の動詞によっている。その叙事詩にしても、いよいよ急迫した場面を描写する段になると、それまでの過去動詞が現在形に変わる。時制（テンス）の区別のやかましいヨーロッパの文法では、過去のことを現在形の動詞で表現することの無理を合理化する必要があつて、これに「歴史的現在」という名をつけた。

日本語のテンスはもともと融通無碍で、過去のことを現在時制でのべるくらい平気だから妙な名前をつくるまでもなかった。

叙情詩が現在テンスの詩であることを認めるにしても、なお、すぐれた作品で、形式的にも、内容的にも、過去時制に拠っているものがきわめて多くある。叙情詩を現在時制の詩なりと規定